第八章　神の悟り

第八章　神の悟り

「人若し此世にて神を悟らば眞となり、若し然らずばそは禍ひなりし」(180)と優波尼沙土(ウパニシャッド)は云ふ。

然らばこの神への到達とは如何なる性質のものか。神とは多くの物の中にて断定的に分類されて、我々の所有物として保ち得る物、政治、株式、金儲け、若しくは社会的競爭に於て特別に我々に好意を寄せる同盟国として利用し得るが如き物ではない。我々は多くの人はさうしたく思つてゐる物だが、その物に別墅、自動車、若しくは銀行信用と同列に神を見ることは出来ない。

我々は人生の畫が神を渇望する時抱く希望の眞の性質を了解しやうと努めなければならぬ。如何に高價なりとも、人生の所有物を増さんとする望みがその希望を構成するのか。断然違ふ。我々の貯へを更に絶えず増さんと

することはてしなくうんぬりする仕事である。実際、霊が神を求める時、霊はこの世なき蕃業と蓄積と使して終りなきことゝから逃れんことを求めてゐるのである。霊が求めるものは附加物ではなくて、非永久的な万物に有る永久的なもの(181)、全享受を享一にする最高の永続的歓花(182)である。それ故に優婆尼沙土(ウパニシャッド)は凡ての物を嚥下(ラサ)し吸収(ナーム)(ラサタマフ)(ニティヨーニティヤーナム)する時、汝は特別のものを求むることでもなく、汝が新しいものを作ることでもない。

宇宙に存する凡ての物は神によって造まれるものなるを知れ。神により与へられしものを汝でも享受せよ。自分自身のものならぬ富への貪欲を世が心に有す勿れ。」(183)

存在するものは汝でも神によって満たされてゐることと、又世の持つ物は汝でも神の賜物なるを知る時、世は有限の中に無限を了解し、贈り物の中に贈り主を了解する。その時、実在せる凡ての事物は一真理の示現の中にその唯一の意味を有つこと、世の凡ての所有物

は、を小自体の裡にでなく、を小が作る神との関係の中に世に対する唯一の意味を有つことを世は知るのである。

そこで我々が他の物を見出し得る如くには婆羅吸摩を見出し得るとは云ひ得ない。他物よりも寧ろ一物に、彼処か他所と云子よりも一所に婆羅吸摩を求むるは問題なきことである。朝の之を求めて食料屋へ走るには当らぬ、眼を開けばそこに之は在るのだ。その物に婆羅吸摩は到る処に在ると知るためには、

唯と己小自身を放棄す小ばいゝのだ。

こ小佛陀が我々は自我の生活の裡に閉ぢ籠ら。ぬ物にと我々を戒めた理由である。若し一層積極的に、完全に、且つ満足にを小に取つて代るべき彼物もなかつたならば、かゝる戒めは絶対的に無意味であらう。彼人も人写の持てる凡ての物を、彼物も得ら小ないのに放棄すると云子この忠告を真剣に考へ得ないし、況んやを小に対し彼等の熱をも持ち得ない。

を小で我々の日夕の神の礼拝は、真には神を

漸次獲得する過程ではなくて、渾一への凡ての障碍を除き、献身や勤行に、善や悪に神意識を拡げつゝ我々自身を放棄する日々の過程である。

優婆尼沙土（ウパニシャド）に曰く「その目的を完全に射抜き、楽羅吸摩（ラヤマ）の如く、楽羅吸摩（ラヤマ）に没入せよ」と。かく楽羅吸摩（ラヤマ）によって絶対的に包まれることを意識することは、実に精神集中の行ではない。それは我々の生活全体の目的でなければならぬ。思想や行動の凡てに於て我々は神を意識せねばならぬ。「凡てに浸透せる歓喜の力室に満ちぬ」、何物も生くるを得ず、動くを得ざるべし」（184）との真理の了解を我々の生活の日々に於て一層容易ならしめよ。我々の全行動に無限の活力の衝動を感ぜしめよ。而して我はせよ。

神は我々の到達し得ぬ彼方に在る、それで神は我々にとり無価値なものなるかの如くである、と云はれもしやう。然うだ。到達なる語が所有の観念を含む味するならば、神は

到達し得ぬものと承認せねばならぬ。然し我々は人生の最高の享受は所有でなくて獲得（だれでも同時に不獲得であるが）に在ることを心に銘すべきである。我々の肉体的快樂は此実在物に対しては体系的余地を残さない。肉体的快樂は地球の孔せる衛星のごとく周囲に少しも空気がない。我々が食を攝り、飢を満たす時、それは所有の完全な行である。飢満たされぬ限りは、食は快樂である。故又ならば、その時に我々の食の享受は凡ゆる点

で神と接觸するからだ。然し食の享受が一度び満たされるや、即ち換言すれば、我々の食欲がその実在の段階の終りに来る時、食欲はその我々の終末に来る。我々の智的快樂の凡てに於ては、余地は一層広い。限界はずっと離れた遠くに在る。我々の深い力の表に於ては、得と失得とは並行していつも進む。ヴィレニヌ 此紐派

の叙情詩の一に、表人は悲人に語る。「私は誕生以来貴せの歓の美を眺めてゐたかの如くに思ふ。然し私の眼は未だ飢えてゐる。私は

貴女を幾百万年れの百、私の胸に押しあてゝ
みた指に思ふのに私の心は満たされないと
。

このことは我々が我々の快楽の中に求めて
みるものは、眞に神であることを明かならし
むる。富有たらんとの我々の願望は特定額の
金を得る願望ではなくて、不定のものである
。として我々の享受の中最もはかない享受は
永遠との瞬間的接觸に過ぎない。人生の悲劇
は、決して無制限となり得ざる物の限界を拡げ
んとの空しき試み、有限の梯子段を愚かしく
れ増やすことによって神に到達せんとする空
しき試みの中に存する。

我々の靈の眞の願望は、我々の所有物以上の
ものを得んとするに在ることが、このことから
明らかである。觸れ、感ずることの出来る物
に囲まれて靈は叫ぶ。「私は得ることに疲れ
た。あゝ、決して得られる筈のない神は何處
に在ますのか。」

人百の丁史のいたる處で、放棄の精神は人

(186)

宇の霊の最深の実在であることを知る。霊が
何等かの物について、「私は此を欲しくな
い。私は此の上に在るから」と云う時、霊
は霊の裡に在る最高の眞理を披瀝してゐるの
である。少女の生命がその人形より大きくな
る時、即ち少女が凡ゆる点で人形以上のものの
であると了解する時、その時には少女は人形
を捨てるのである。所有と云ふ行為によって
我々は自分が所有せる物よりも偉大なるを知
る。我々自身より劣るものに縛り附けられ
てゐるのは全く悲惨である。これはマイトレ
イー(186)が夫の家を去る眞際に、夫が彼女に財
産を与へた時感じた所である。彼女は夫に尋
ねた。「此等の物質は至高の物を得る助けに
なりませうか。」即ち換言すれば、「此等の
物質は私にとって私の霊以上のものですか。
」と。夫が「此等の物は世俗的所有物に於て
富ますであらう。」と答へた時、彼女は直ち
に「それなら此等の物を私はどうしたらよい
かと云ふた。人が眞にその所有物が何で

あるかを了解して始めて、人百は所有物に一つき最早や他人の幻惑に感じないのである。その時に人百は自分の霊が此身のものより遙か以上のものであることを知り、その束縛から更に解るのである。かくして人百はその所有物より大きくなることにより、眞に自分の霊を了解し、人百の永遠の生命の途上に於る進歩は一時の自己放棄を以てしてあることを了解する。

我々は絶対的に無限存在(187)を所有し得ぬと云

ふことは單なる智的命題ではない。それは経験されねばならない。そしてこの経験は至福なものである。鳥は空を飛ぶ、その翼の羽搏きの一々に於て空の涯てし無さを経験し、その翼は決して鳥を空の彼方へ運び得ぬことを経験する。そこに鳥の歡喜がある。籠の中では空は限られてゐる。鳥の生活の目的の凡てにとつては小で十分であるかも知れぬ。

―たゞ仲要以上を出ないだけである。鳥は仲要の限界内では楽しみ得ない。鳥の持てる

れのが、その幸に欲し又は了解し得る以上に計り難き程多いことを感じなくてはならぬ。そして始めて鳥は樂しいのである。

かくして我々の靈は無限界を飛翔しなければならぬ。そして靈は靈成就の終点に来り得ぬとの感覚にその最高の歡喜が有り、最高の自由があると云ることを毎瞬時感じねばならぬ。

人生の永續的幸福は何物かを得ることにはなくて、自分自身よりも偉大なれるものへ、人生の個人的生命より大なる理想へ、吾家や人類や神の理想へ己れを捨てることに在る。その理想は人生が自分の生命をも含めて、その持てる全てのものを手放すことを容易ならしめる。眞に人生の持てる全ての物を要求し得、又人生をその所有物に対する執著から解放し得る或る大なる理想を人生が見出す迄は、人生の存在は悲惨であり、汚い。佛陀とキリスト(188)と印度の偉大な予言者はこの大理想を代表する。彼等は我々に我々の持てる凡ての

物を放棄する機会を賜らす。彼等がその神々しい喜捨の椀を差出す時、我々は与へるを得ぬと感じる。そして与へることに我々の最高の歓喜があり、自由があることを見出す。何故かならば、与へることは我々自身をその程度迄神と合一せしむることであるからだ。

人生は完全ではない。人生は未成品である。現在のまゝでの人生は小である。そして若し永久に人生が其處に止つてゐると考へ得たならば、我々は人生が死像し得る最も恐ろし

い地獄の觀念を持たねばならないであらう。人生はその成るべき姿に於て無限である。そこに人生の天子が有り、人生の救済が有る。人生の現在は得ることの出来る物、用済みの物で、毎瞬時心をとられてゐる。人生の成るべき姿は得られる物以上の何物か、それは決して所有してゐない故に決して失ひ得ぬ何物かに飢えてゐる。

我々の存在の有限の極は仲要の世界にその所をためてゐる。そこでは人生は生くるためで

に食物を求め、暖を取るために衣服を求めてうろつく。この欲域に於ては、即ち自然界では物を得ることが人生の本分である。自然人はその所有物を拡大することに忙殺されてゐる。

然しこの得ると云ふ行為は部分的である。それは人生の必要物に限られてゐる。我々は丁度器（ウツハ）はその容（カタチ）の程度迄のみ水を容れ得る如く、唯我々の要求の程度迄のみ物を持ち得る。我々の食物に対する関係は唯養ふことにのみあり、家との関係は住むことにのみ在る。物が我々の或特定の要求にのみ適合することをば我々は利益と云ふ。かくて得ることは常に一部を得ることであり、それ以外であり得ない。そこで獲得の熱望は我々の有限の自我に属する。

方向が神に向つてゐる我々の存在の面は富を求めずして、自由と歓喜とを求める。そこでは必要の支配は止み、我々の本分は得ることでなくて成ることである。何に成るのか。

婆羅門（ブラフマ）と一になるのである。この神の領域は渾一の領域であるからだ。そこに故に優婆尼沙土（ウパニシャド）に曰く、「人若し神を知らば眞となら(189)ん」と。この印ち成ることであり、より多くを持つことではない。言語は、若しその意味を汲み知らば、尚を増さない。言語は思想と一に成ることによって眞となる。

西洋は、我が神と一なり(190)と大膽にも宣言し、旦つその追從者に神の如く完全たれと勸めた人をその師として認めたが、そこには、我には

神と渾一なりとの印象の思想とは決して一致しない。西洋は人間が神に成るとの如何なる合意をも神聖冒瀆の一端として咎める。この絶対的超驗の思想は確かにキリストが説いたことではない。又、恐らくキリスト教神秘主義者の思想でもなくして、西欧キリスト教国に於て普及した思想である様に思はれる。

然し東洋の最高の叡智は神を得ることと、神を所有の特別の物質的目的に利用することが人間の本分でないことを主張する。我々が

翹望し得る凡ては神とます（一となること
である。雜多の欲域なる自然界に於ては、我
々は獲得によつて成長する。渾一の欲域であ
る霊の世界では、我々は我々自身を失ふこと
により、即ち抗合することによつて成長する
。物を得ることは我々が述べし如くその推貿
上部分的である。て小は特定の要求にのみ限
らかる。然し存在は完全である。て小は我々
の全体に属する。て小は仏子の中要より起る
に小ずして、我々が霊の中に持つ完全の原理

である神との我々の親近関係から生ずる。
さうだ、我々は婆羅門（ブラフマ）とならねばならぬ
。我々は此の変ひから尻込みしてはならない
。我々の存在は、若し我々がそこに在る最高
の完全を了解することを仏とも期待し得ぬな
らば無意味である。若し我々が目的を持ち乍
ら、それにどうしても到達し得ぬならば、そ
れは全く仏の目的でもない。

然し婆羅門（ブラフマ）と我々の個人的霊との間に仏
の相違もないと然らば云ひ得るや。勿論、相

違あるは明白である。相違を幻覚と呼び、若しくは無智と呼び、或ひは仏人等名称を与へようと、とにかく相違はある。此は説明を俟し得るが、相違を釈明し盡すことは出来ない。幻覚と雖も幻覚としては眞である。

婆羅吸摩（ブラフマ）は婆羅吸摩（ブラフマ）である。それは完全と云ふ無限の理想である。然し、我々は眞の我々ではない。我々は常に眞に成るべきであり、常に婆羅吸摩（ブラフマ）になるべきである。この「ある」ことと「なること」との両者には愛の永遠の

表示がある。そしてこの神秘の深所に創造のはてしなき行進を續けさす眞と美との全ての源がある。

急湍の音響の中に、歡喜に満ちた確信、即ち「余は海となるべし」が響く。それは空しき僭越ではない。それは眞理なる故に眞の謙遜である。河はさうなるより他に道がない。河岸の両側には無数の野や森があり、村や町がある。河は其等を清め養ひ、諸所へ産物を運び込ぶ方法で奉仕出来る。然し河は此

宇の町や森、野や村と唯部分的に関係を持つに過ぎない。そしてどれほど永く此宇の百を低徊しやうと所は別のものである。それは決して町とも森ともなれない。

然し河は海となり得る。而も事実、海となる。動きの少い水も、大洋の大なる不動の水と親近性を持つてゐる。それは為進の途に横はる幾千の物を拾て流れ行き、海に達して運動は終るのである。

河は海となり得る。然し河は海を河自作の重要な部分とすることは決して出来ない。若し所かの機会に、所が所か広い水面を取巻き、それを海として海を河自作の一部とした主張するならば、我々は直ちにその然らざるを知る。河の流れは未だ流れが流れを設定し得ざる大洋に依然休息を求めつゝあるを知る。

同様に我々の霊は所が海となり得る如くに婆羅吸摩となり得るのみ。霊はその位置の一点に於て、凡ての物に觸れ、それから離れ、動いて行くが、終に婆羅吸摩を離れ、婆羅

吸摩の彼方に動いて行くことは出来ない。一
度び我々が婆羅吸摩に於る休息と云ふ究極の
目的を了解するや、靈の運動の凡ては目的を
獲得する。はてしなき活動中に意義を与ふる
ものはこの無限の休息の大洋である。詩、劇
、芸術の全てに表現される美の本質を生成の
不定全さに与へるものは存在のこの完全さで
ある。

詩を生かす完全を思想があるに相違ない。
詩の凡ゆる節々はその思想に觸れる。讀者が

讀み進むに一れて、その滲透せる思想を了解
する時、詩を讀むことは歡喜に満てることゝ
なる。そこで詩の凡ゆる部分は全作の走りに
依つて走り輝いて有意義となる。然し若し詩
が全作の思想を表白することなく、如何に美
しくとも、唯連絡なき心象を投げ掛けるのみ
にて、はてしなく続くならば、それは結局迷
となり、何の益もないものとなる。我々の靈
の進歩は完全な詩の如きものである。それは
一度び了解されるや凡ての行動を意義深く、

歓楽に満てるものとする無限の思想を持つてゐる。然し、若し我々がその行動をこの無限の思想から川離するならば、即ち、若し我々が無限の休息を見ずして、唯無限の活動を見るのみならば、生存ははてしなき無目的に性急に突進する怪異を要と我々には見える。

子供の時代、我々は意味の説明もなく、記号で書かれた梵語（サンスクリット）文典全部を暗記させられ、来る日も来る日も我々は苦心し続けたが、何に向つてとしれぬ先生のあつたことを思ひ出す。来る日

て続けたか、我々は些かの概念も把みみ得なかつた。ここで我々は、我々の課業に関しては、世界の息もつかせぬ活動を唯数へるのみで、此等の活動が毎瞬時、絶対的合宜と調和との中に平衡を得つゝある完全と云ふ無限の休息を見ることを得ない巡観諦者の立場にあつた。我々はかく存在を沈思することに於て眞理を逐する故に、全ての歓楽を失ふ。我々は舞踊家の身振り、手眞似を見る。そして、我々は此等の身振りの一々を必然的に自然にし、且つ美

くしくする永之の音楽に耳を藉さぬ限り、此
音の身振り、手真似は偶然の無情を暴虐によ
つて命令されてゐると想像する。此音の運動
が創造し積げてゐる無数の形を一歩毎にその
旋律に捧げつゝ、此音の運動は絶之ず完全な
音楽に成長しつゝあり、て水と一になりつゝ
ある。そして霊は一ねに変羅双奪に成長しつ
つけなければならぬと云ふこと、霊の凡ての
運動はこの究極の思想により調節されねばな
らぬし、霊の凡ての創造は完全の最高の霊に

贈り物として捧げらるべきなと云ふこと、こ
れは我々の霊の真理であり、霊の歓びである
。
優婆尼沙土に注意すべき言がある。「余は
神を良く知れりとは思はず。若しくは余は神
を知れりとは思はず。或は余は神を知らずと
さへ思はずし(191)と。
知識の過程によつては我々は神を決して知
り得ぬ。然し、若し神が全く我々の達し得ぬ彼
方に在るならば、神は我々にとり絶対的に無

である。我々は神を知らず、然し乍ら我々は神を知ると云ふのが眞理である。

このことは優婆尼沙土の次の文章で説明される。「言葉は心と同様に婆羅吸摩から起る。然し婆羅吸摩は婆羅吸摩のものなる獣花により知る人はすべての恐怖から免れる」(192)と。

知識は部分的である。これ我々の智力は道具であり、単に我々の一部にすぎず、分割され、分析され、且つその特質が部分部分に分数され得る物について消息を伝へ得るからである。然し婆羅吸摩は完全である。部分たる知識は決して婆羅吸摩の知識たり得ない。

然し婆羅吸摩は獣花により、意により知られ得る。これ獣花は完全形の知識であり、それは我々の全存在によりて知ることだからだ。知力は知らるべき物から我々を離して置くが、意は融合によりて意の対象を知る。かゝる知識は即刻的であり、何等の疑ひを容れぬ。それは我々自身の自我を知ることゝ同じ

であり、より一層然りである。

故に優婆尼沙土が云ふ如く、心は決して婆羅吸摩を知り得ない。言葉も婆羅吸摩を知り得ない。(193)

婆羅吸摩は唯我々の霊により、婆羅吸摩に浸る霊の歓喜により知られ得るのみ。即ち換言すれば、我々は融合、即ち我々の全存在の融合によってのみ婆羅吸摩と関係し得るのみである。我々は神と一にならねばならぬ。我々は神の如く完全にならねばならぬ。

然し、如何にしてさうなり得るか。無限なる完全には所詮の手段はあり得ない。我々は段々に婆羅吸摩に成長し得ない。婆羅吸摩は絶対一であり、婆羅吸摩には迷不足はあり得ない。

まことに我々の個人的霊(アンタラートマン)(194)に宿る最高の霊(パラマートマン)(195)の了解は絶対的完成の状態に於てある。我々はこの了解を非存在のもの、この了解の断定的独立のために我々の限られた力に頼ってゐるものと考へることは出来ない。若し我々

の神との関係が凡て我々の自製にかゝるものならば、どうして我々はそれを真なるものと信頼し得やう、又、どうしてそれが我々に力を藉やう。

さうだ、我々は時空が支配を止め、進化の環が渾一の中に没入する所を我々の裡に持つてゐることを知らねばならぬ。靈(アートマン)(196)のこの永久の住家に最高の(パラマートマン)の霊の示現が既に完成されてゐる。それ故に優婆尼沙土(ウパニシャド)は曰く、「最高の空(クラ)、即ち意識の内的空たる霊の深底に隠されてゐる婆羅吸摩(ブラフマ)、即ち眞なるもの、全てを意識せるもの、無限なる者を知れる人は全てを知れる婆羅吸摩(ブラフマ)と融合して、願望の全目的物を享受する」と。(197)

融合は既に遂げられてゐる。最高の霊は我々のものなる霊を自ら花嫁と選び、花婚式は清んだ。厳かな詩句(マントラム)(198)は述べられる。「汝が心を余の心の如くならしめよ。」(199)この花婚式には、進化が其部官の役をする余地はない。これは

る エーレヤフ(200)は、即ち名狀し難い刻の存在は、いつも此處我々の最奥の存在の中にある。「このこゝなるものは、彼のこゝなるものの最奥の目的である。」(201)「このこゝなるものは、彼のこゝなるものの最奥の室である。」(202)「このこゝなるものは彼の住家である。」(203)「このこゝなるものは彼のこゝなるものの最奥の歡喜である。」(204)「こゝなるものの最奥の靈の抗爭は時なる時の中で成し遂げられなければならない。そして今やはてしなき靈の

ラー表示が進行してゐる。(205) 永遠の中に得られた最奥の靈は今や時空の中、悲哀の中、現世や彼岸で追求される。靈の花嫁がこのことをよく了解する時、彼女の心は福ひに滿ち、安らかである。靈の花婿は所の如く、その一緒に於て絶えず大洋に達せんとしつゝある。一緒に於ては、その存在は永久の休息であり、完成であり、彼緒に於ては、それは寸斷なき運動と變化とであることを知る。靈の花婿が兩緒は不可分に抱かれてゐることを知る時、その時

に宇宙の主を自分の主人と知る權利によって、宇宙を自分の家庭だと知るのである。その時に彼女の全奉仕は妻の奉仕となり、人生の仁配、生涯は彼女の妻の力を立証し、微笑裡に彼女の妻人から贈り物を受け得べく意気揚々と負はれる試錬と現はれる。然し、彼女が逐因に暗の中に止まり、面紗（ベール）を被ぬ、妻人を認めず、妻人から別れ小世界を知るのみならば、当然女王として君臨し得る此處で女中として奉仕するのである。彼女は疑ひの余

り動揺し、悲しみと落膽との余り泣く。「童の花嫁は飢餓から飢餓へ、苦労から苦労へ、恐怖から恐怖へと渡り行く。」(206)

私は前夜祭に集へる群衆の喧噪の呂中で、払曉に、書いて耳いた歌の一節を忘れ得ぬ。

「後船夫よ、向ふ岸へ後ぎ小ぎ。」

我々の笑みの雑踏の中で「後ぎ小ぎ」との叫びが耳之る。印度では、二輪馬車挽きは車を駆り「ゝ」「後ぎ小ぎ」と歌ふ。巡回食料品屋はお客に品物を命「と」「後ぎ小ぎ」と歌ふ

自身のものと云る時、彼岸は遠くに離れてゐる。そして私の中に宿る定全感を失ひ、我々の心は絶えず此の岸を求め叫ぶ。私の此岸の凡てと、此の岸とは彼の意に充て定全に一致さることを期してゐる。

私のものなるこの「我」は、それが自分のものと知る家を求めて日夜辛苦する。あゝ、この家を彼の家と呼び得る限り、此の私の苦痛は拭ることはないであらう。その時迄私は藻搔き続けやう。

てしてこの私の心は一

如に叫ぶであらう。「彼船夫よ、私を渡して呉れよと。この私のものなる家が彼の家と合る時、その瞬間に古い壁が家を取囲むと離れ、この家は消滅る。此の「我」は休みなし。その精神と同化し得ぬ利得、それが持ち、保留し得ぬ利得を得人としてこの「我」は働き、ある。万人のためになるものをこの「我」の腕の中に握ら人と努力して、この「我」は彼を傷つけ、傷けられ、「彼して呉れよと叫ぶ。然しこの「我」が「私

の仕事のすべては汝のものである。と云ふ得るや否や、凡ゆる物はそのまゝで居り、唯この「我」は後ふる。

汝の家とさふなるこの私の家に帰すして仏處で汝に会ひ得やうで。汝の仕事に変へられたるこの私の仕事に帰すして仏處で汝と一緒になり得やうで。若し私が私の家を去れば、私は汝の家に到り得るべし。若し私が私の仕事を止めれば、私は汝の仕事に於て汝と一緒になり得るべし。汝は私に住み、私は汝

に住む故である。私なき汝、汝なき私は無である。

それ故に我々の家、我々の仕事の眞只中に於て、「後ふ」よりの行りが起る。これ此處に海が彼岸、そして此處と雖も到達せらるゝことを待つてゐる彼の岸がある。そうだ遠方にもなく、彼の仏處にもなく、此處にこの永遠の贈物があるためだ。

本文終了